ケアの倫理と若者の「自立」

加藤 美帆

大学の講義でジェンダーをテーマにした回は、とりわけ学生のコメントの密度が濃い。サークル活動やアルバイト先、高校時代の進路指導や親との会話など、現代を生きる若者たちの日常にジェンダーによる生きづらさが様々な形で埋め込まれていることが伝わってくる。ときにそれらは、家族や友人、恋人などの親密な関係のなかの権力関係や抑圧という側面ももっており、解きがたい桎梏（しっこく）となっている。

大学生の時期は、ひろくみれば若者たちが自立していくまでの移行期にあたる。ただし、「自立」がジェンダー化した概念であることにも注意を向ける必要があるだろう。『広辞苑』にある「他の援助を受けず自分の力で判断したり身を立てたりすること」といった説明が自立の意味として一般的だが、それらは往々にして、安定した仕事についているか、十分に稼ぐ稼得能力があるか、結婚しているか、といったことをその指標としている。しかし、『男女共同参画白書』（内閣府男女共同参画局）をみると、二〇二〇年度に日本で非正規雇用労働者は、男性が二二・四％に対して女性は五四・四％となっており女性の労働者の半分以上は非正規である。また賃金水準は男性の一般労働者を一〇〇とすると女性は七四・三、正社員・正職員の女性にしても七六・八となっている。つまり安定した仕事でしっかり稼げているか、という基準で自立をとらえると、女性の多くが当てはまらない可能性がでてくる。また、男性には「立派な」就職先を得てしっかり稼ぐ期待が、依然として一層強くのしかかっている。現実の社会における経済的な自立に困難があったり、そこに社会的プレッシャーが強くかかれば、家族形成にその代替や圧力への慰めを求めることが強まるかもしれない。しかし社会の権力関係は、家族にもやはり埋め込まれている。

岩上編『若者と親の社会学』（二〇一〇）所収の「第二章

若者の親子関係とその経済的背景にみるジェンダー」は、教育をおえた未婚の子どもがいる家族関係を、親子それぞれの性別と経済力に着目して分析しており示唆的である。内容をかいつまむと、親子での会話や買い物、外食などを共にすることは、親の側に経済力があり、加えて子どもの側は、息子の場合は正社員であるときにその頻度は高くなるという。親子関係の良し悪しも、親の経済的な余裕や子どもの社会的達成によって左右される様子が表れている。他方で、子どもの側が娘の場合、親に経済力があることは同様だが、娘の収入が低いほうがその頻度は高くなるという。経済力が女性に対して強くは期待されていないにしても、収入が低い方が〝仲の良さ〟につながるというのは、逆説的にも思える。しかし、いわゆる友だち親子の関係についての、「一見対等だが、実は一方的な供給と消費でなりたっている」（宮本 二〇〇二）という宮本の指摘を踏まえると、親密な親子関係が若い女性の経済力の脆弱さという力の差を前提にした関係でもあることに気づかされる。また、男性の場合に社会的な期待の達成が家族間の関係も良好にする条件であるということは、裏を返すと失職や収入の低さが家族関係の悪化につながりやすく、結果として深刻な孤立に陥るおそれが高いことを示している。いずれにせよ、そこには若者たちの自立が、貧困や社会的孤立のリスクと背中合わせの危ういバランスの上に成り立っていることが垣間見える。自立を求める社会調整弁という役割を家族が担うことで、表面上は秩序が保たれているが、家族という関係がその役割を引き受け続けることはきわめて難しい。家族は実際には、必然的に不安定で変化を内包しているためである。今日、このジレンマのもつ緊張はより一層強まっているのではないだろうか。

果たして弱さを抱えた個人を受けとめるのは、家族だけなのか。この問いを考えるうえで、自立や家族の意味の再考が必要になっている。独立した克己心ある強い個人という前提から、相互の関わりのなかで他者の声に応える「ケアの倫理」（ギリガン 二〇二二）にもとづく社会へ。社会の編みなおしが、必要となっているのではないか。

かとう・みほ　総合国際学研究院教授　教育社会学

文献案内

キャロル・ギリガン『もうひとつの声で――心理学の理論とケアの倫理』川本隆史他訳、風行社、二〇二二年
岩上真珠編『〈若者と親〉の社会学――未婚期の自立を考える』青弓社、二〇一〇年
G・ジョーンズ、C・ウォーレス『若者はなぜ大人になれないのか――家族・国家・シティズンシップ』宮本みち子監訳、新評論、二〇〇二年